

## 心が育つということ その(5)

### 幼児の持つ「内―外」意識の変容をめぐる

豊田 一秀

#### (4) 社会的なコントロール

(A) 大人(教師)と子どもが相互に持つコントロール感

―大人と子どもが折り合うという事をめぐって―

モノに対するコントロール感に比べて、人間に対するコントロール感を、子どもは持ちにくいということについて、私は前節より述べている。子どもにとって、特に、親や教師は様々な特権を持った特別な存在である。

事実、この両者は、しつけ、教育の名の下に、子どもをコントロールしようとする。しかも、それらのコントロールは、「親心」「善意」という衣をまとい、親や教師

自身にも意識されていないことが多いので、それだけ根は深いと言わなければならない。

一例として、一般に、しかるよりほめることを教育のポイントとして重視する意見は多い。しかしこれも、少し穿った見方をするならば、子どもをコントロールするには、しかるよりもほめる方が効果的であると語っているにすぎない、と見ることも可能であろう。ほめることがテクニクに墮してしまうと、すぐにこの問題に突き当たってしまう。親や教師に認められ、ほめられたいと思う子どもの気持ちは強い。しかし、その気持ちを利用

しようとはかりすると、いつか子どもは、自分が大人にコントロールされているだけで、本当の自分の心はそこにはないことに気が付き、大人を憎み、自分を嫌悪するであろう。大人が反抗期と呼ぶような時期は、子どもが、それまでの自分と外界の関係を修正しようとしている時のサインであると見ることもできよう。

このように、コントロール感というものを少し遠くから見てみると、人間は誰でもコントロールすることを望むものの、コントロールされることは望んでいないという事実には私たちは気が付かされる。子どもも、大人と同じように、他者（大人を含めて）をコントロールしたいと望む存在なのだ。

子どもと日々接している親や教師は、この点について強く心しておかなければならないと私は思う。答えは簡単ではない。子どもに、親や教師に対するコントロール感を持たせるということは、親や教師が、子どもの言いなりになることを意味する訳ではけっしてない。しかし子どもの行動、言動を大人の価値基準で判断する以前

に、それを事実としてそのまま受け、その子の、その時の心持ちをわかれとうとする配慮は、子どもにコントロール感を持たせるに当たって不可欠であろう。なぜなら、このような配慮の中から、次に子どもに伝えようとする姿勢が生まれてくるからである。

家庭や保育の場において、どんなに教育的な内容を子どもに与えようとしても、当のその子どもに即していなければ、本人にとっては、ひどく迷惑なことであろう。しかし、逆に常に子どもの望むことのみに応えているのが最良の方法かと言えば、それもまた一面的に過ぎる。今、ここにいて、この子どもの現在と未来にとって、何が最も必要なものかという問いかけに対する答えは、親や教師のみが知っているわけではないし、また子どものみが知っているわけでもない。その答えは、大人と子どもが縦糸、横糸となって織り込んで行く一枚の織物に例えられるであろう。そして、この答えを求め、模索して行く過程こそが、お互いが、お互いに対してコントロール感を得て行く過程そのものに他ならない。

(B) 子どもの、親へのコントロール感

自分の子どもを育てる中で、私共親が、子どもに気付かされることは多い。長男Aは、四歳一か月から約一年半の間、依頼心が強くなり、時にひどい夜泣きをするといった、不安定な時期が続いた。原因はいろいろな要素が絡み合っていて、簡単には求められないと思う。ここでは「子どもの親へのコントロール感」という題にそつて、Aの苦悩を、親へのコントロール感の取得と、親からの被コントロール感の修正という面から、兄弟関係をも含めた中で考察を進めていきたい。

### △事例3—3▽

保育園に行き始めて三か月、Aは、やっと登園をいやがらなくなってきた。しかし、朝がうましくない。皆がまだ寝ている時から「起きて、起きて！」とうるさい。親がいくら返事をしても、同じことを繰り返す。着替えも、本当は自分で出来るのだが、「やってー！ できない！ わからない！」を繰り返し、自分では全くやろうとしない。あまりうるさく言うので、母親が「自分で出来るでしょ

う！」と語気を荒くすると、「大きくならなければよかったー！」と言って泣き出す。  
(家庭にて)

目覚めから着替えまでの一光景である。Aは、いろいろと親に依頼をしているが、親は、完全にAの依頼に応えている訳ではない。それに対して、同じことを繰り返し言うAの中に、非理性的に（気持ちが壊れてしまっている）なっているAを私は見る。本人も、その訴えの内容そのものよりも、その言い方を通して、自分のどうしようもないイライラした気持ちを表明しているであろう。このことは、Aが夜泣きをする時に、「おながが痛いー！ 目がかゆいー！ 足があついー！」などと繰り返し言い続けるのと同じであると思う。（これらは、どれも身体的な不快感であつて、Aは自分の心の状態を、体に置き換えて表明している。）

成長、発達と共に、いろいろなことが出来るようになることは、親の喜びでもあるが、それ以前に、何よりも子ども本人の喜びであることが、その本来の姿であるはずである。しかし、Aはここでは、出来るようになった

自分に、喜びよりもむしろ痛みを感じ、出来ない時の幼い自分に気持ちを向けている。このAの心の動きは、この時期、この事例にあるような事以外にも、形を変えて表明されたが、いずれも△○△が出来ない自分▽を志向するものであった。(3)マージナルな空間 降園の時、目覚めの時を参照 一九九〇年6月号)

この時期、Aが事ごとにあたって、本当は自分で出来ることを、親にやらしてもらおうとしたのには、様々な意味があったことと思う。第一には、自分の意志で、今へ出来るようになった自分▽があるのではない、という自己主張があったのであろう。私たち両親は、Aの気持ちを大切に育てて来たつもりであったが、それでもAにしてみれば、自分が常に課題を与えられ、それをクリアーすることで親に評価される存在であると、自分自身を見るようになっていたのではないだろうか。すなわち、親にコントロールされている自分を感じ、逆に、親に对应してもらっている感じ——親に対するコントロール感——を持ってなくなっていたのではないだろうか。第二

には、生まれて初めて集団生活を体験したAが、保育園を本当に楽しめないままに、保育園で自分を主張しきれない分だけ家庭において自己主張が強くなったのである。第三には、弟のBと自分を比較して、Bをうらやむ気持ちだが、Aの中に強く働いていたと思う。二歳のB



は、着替えも親にしてもらっているし、食事の助けも受けている。しかも、保育園に行かず一日、親と遊んでいられる。大きくなりたくないAにとって、正に弟のBこそ、そうでありたい自分の姿に思えたのではなかったのではないか。換言すれば、いろいろなことが出来るようにという事に、価値を持ってなくなっているAにとっては、唯、いろいろなことを、自分でしなくてはならなくなった事としてのみ、自分の成長を認識し、弟へのうらやみの気持ちを強めていたのだと思う。

自分で出来ることを自分でするのは、当然であるとして、私たちはAに求めてきた。しかし、Aにしてみれば、それは常に親の要求に応えることではなかったのであろう。それ故に、「本当は、やれる自分なのだから（動作として）、自分ですることばかりを要求し続けないでほしい」という主張を、Aはしたかったのではないか。

このようなAを前にして、親はそれまでAに求めていた「当たり前前感」を修正せざるを得なくなった。具体的

には、以下の四点について考えてみた。(1)○○が出来るAを、当然とは思わずに、内面では、Aなりに努力していることをよく理解しておく。(2)依存心が強くなっている時には、ひとまずは、その気持ちを受け入れてみる。(3)今までも、そうしてきたつもりではあるが、他の子どもや、平均と比較しない。(4)親がイライラさせられた時には、親がイライラすることのみで、親の気持ちをAに表明するのではなしに、そのいら立ちを、言葉に置き換えて伝えるように努める。

このような、親側からの調整の中で、Aは少しずつ、親が自分の気持ちに伝えてくれているという意識、すなわち、親へのコントロール感を回復し始めてきた。Aの心の中には、自分が大きくなって、何でも一人で出来るような自分になりたいという気持ちと、逆に、小さい時に戻って、何でも親にしてもらいたいと願う、相反する二つの気持ちがあるように思う。私たち親は、これまでに、大きくなりたいと志向するAの気持ちに対して、Aの実力(Aが自分でそう志向する気持ち)以上のものを

要求していたのではなかっただろうか。そして、Aもその気持ちに伝えようとして、心の中に無理が生じたのだと思う。その結果として、Aは心のバランスを保つべく、丁度その逆である、何も出来なくてもよかった、小さい時の世界へへと、その気持ちを向かわせたのではないだろうか。しかし、Aが自分の気持ちを向かわせたこの世界も、実際には、Aの実力以下の世界であって、Aに合った世界ではないことに、Aは気付き始めるのである。

例えて述べるなら、Aの心のなかで、この時期、大きくなりたい気持ちと、小さくなりたい気持ちの間を揺れる振り子の振幅が大きかったと言えるであろう。この振り子の振幅の中心に、Aの真の姿があると考えれば、Aが親に対するコントロール感を取り戻し始めたことは、この振り子の振幅が小さくなってきたことであると言ってもよいであろう。

Aは、自分に対する幼児なりの正しい認識を持ち始めている。その認識とは、AはAの実力以上の存在ではない

いし、そうかと言って、実力以下の存在でもないという認識である。

このことは、以下の二つの事例の中で見られるような、小さなAの行動の中にも見ることが出来る。

#### △事例3―4▽

夕食の時、大人用の少し大きめのハシを母親が用意して、Aは、初めは少し嬉しそうにしていたものの、すぐに、こんなハシは大きすぎる、自分はまだ小さいのだと言って、母親にハシを突き返してしまう。そのような事があつた一か月後、夕食前のひと時、AはBのめんどうをよく見て、一緒に楽しく遊ぶ。楽しい気持ちで食卓に付くと、以前に大きすぎると言って怒ったハシを、自分から出して来て、使ってみようかなと、独り言を言いながら使い始める。

(家庭にて)

この事例において、親から直接言われたときには、Aは強く課題意識を感じてしまつて、自分を幼くすることで、親の要求を退けようとしている。しかし、一方において、自分にゆとりがあり、自信に満ちている時には、

Aは、新しいハシに対するコントロール感を持つと、自分から課題に挑戦している。

### △事例3―5▽

家族四人で楽しい夕食のひと時を持つ。AもBもよく食べる。Aはミソ汁を残そうとするので、私が、それ位は食べるように言うと、「それじゃあ、食べさせてよ、ぼくと代わりばんこでいいからさ!」とAは言うので、私はそのAの提案に同意する。食後のアイスクリームに私は、リキュールをかけて食べている。子どもたちは、興味津々でそれを見ている。

Aは、麦茶をティースプーンに一杯取ると、お酒ですと言つて、自分のアイスクリームにかけている。それを見たBは、ぼくもと言うと、もう食べ終わつたアイスクリームの皿に、麦茶をコップから入れ始める。溶けたアイスクリームと麦茶が混ざつて、何とも言えない白濁した液体が出来る。Bは、お酒ですと言いながら、おいしそうにそれをすすり始める。Aと私は目を合わせると、小声で「おい! あれがおいしいそうだって、ウヘー!」とささやき合

う。Bは、その話がきこえてもかまわず、平気で飲み続ける。しばらくすると、なんと、AがBに向かって「そのお酒、少しちょうだいよ!」と真顔でたのむ。Bはだめだと言うので、私も一緒になつてBにたのんで、やっと小さなグラスに半分だけ分けてもらう。Aは嬉しそうにそれを口にする。「ウヘー、ますい!」と一言。皆、大笑いする。

(家庭にて)

食後のだんらんのひとつコマである。Aの心の動きを追つてみると興味深い。Aはミソ汁を、本当は残しなかつたのだが、何とか飲むうとしていた。以前であつたら、このような時には、もっと気持ちをこわしてしまつて「たべさせてー!」と叫んでいたであらうが、この時は、「代わりばんこでいいからさ!」と自分の方から歩み寄つてきている。私は、このAの、以前に比べて自然な振舞いを見て、その提案に同意する。

食後の時、Bの作つた気持ちの悪い飲み物を前にして、Aも初めは気持ちが悪いつつたのだらう。その時のAの気持ちは、私の側にいた。

しかし、あまりにおいしそうにBがそれを飲んでいるのを見ているうちに、Aの気持ちはBの世界に移り、Bのカクテル？ をほしい気持ちだが、Aの中に起こっている。そして、やっと分けてもらったカクテルではあるが、いざ、それを口にしてみると、意に反して、とてもそれを、おいしいとは思えず、AはBの世界の住人になることは出来ないことを感じていたのだと思う。

Aは、これまで、自分に向けられた課題に苦しくなった時、自分の気持ちを幼かった時に向け、何も出来ない自分に帰ることで、相手からの被コントロール感を拒絶し、同時に、そのネガティブな主張を（本当は出来るのに出来ないと言う事）親に認めさせることで、親へのコントロール感を取り戻そうとしていた。その時、弟Bの存在は、あこがれと、しつとの対象となっていた。しかし、Aが自分自身を取り戻すなかで、実際に、二歳の弟の世界に入ってみると、もうAにとって、そこは、安住の地とはなり得ない現実を知る。この事例は、楽しい時におけるAとBのやりとりであるが、この中にも、内的

な世界を整える努力をしているAの姿が見られて、興味深い。

#### (5) 自己に対するコントロール

コントロール感を持つということについて、これまで様々な対象を通じて考えてきた。こうして考えてみると、対象の多様性と共に、コントロールそのものにも二つの種類があることが明らかになってくる。本項においては、コントロールを、その意志の持ち方によって二つに分類し、自己に対するコントロールとの関連の上で考察してみたい。

#### (A) 二種類のコントロール

人生の初期において、特に母親が乳幼児の気持ちに配慮する中から、乳幼児が母親に対してコントロール感を持つことについては、すでに述べてきたところである。

第一のコントロールは、乳幼児が母親に対して持つこ



のようなコントロール感に代表されるものである。これは、自らは、全くその思い方を変えることなしに、自分の思い通りに対象を変化させようとする、すなわち、相手が自分に合わせてくれる中で得られるコントロール感である。この種のコントロール感を得るためには、相手が常に本人に従ってくれている必要がある。このように、相手の変化によって得られるコントロール感という意味で、私はこれを $\wedge$ 受動的なコントロール $\vee$ と呼ぶことにしたい。(この受動的なコントロールは、幼児に多く見られるものの、けっして幼児だけのものではないことを明記しておきたい)

他方で、子どもがモノに対するコントロール感を得る過程において、子どもが、自分の思い方を調整して行かなければならないということについても、すでに私は述べてきた。すなわち、子どもは、水を高い所に流そうと思っている限り、けっして水を思い通りにコントロールすることは出来ないのであって、水を低い所に流そうと思えば、水に対するコントロール感を得るこ

とが出来るのである。

第二のコントロールは、このように、モノへのコントロールに代表されるものである。これは、自らの思い方を調整することで、対象に対するコントロール感を得ようとするものであって、自分の思い方の方を対象に向けて変化させるという意味で、私はこれを $\wedge$ 能動的なコントロール $\vee$ と呼ぶことにしたい。この能動的なコントロールは、モノに対する場合よく見られるが、社会的な場面においても重要なものであろう。

以下においては、前述の $\wedge$ 受動的なコントロール $\vee$ と $\wedge$ 能動的なコントロール $\vee$ を、自己を対象とするコントロールの中にあてはめて、人間がその内的世界を広げてゆくことと、自分に対して自由になることとの関連についても考えてみたい。

(B) 自己に対するコントロール

これまで私は、二種類のコントロールについて述べてきたのであるが、この受動的コントロールと能動的コン

トロールを、へ自己に対するコントロール✓にあてはめて考えた場合、どのような違いとなるであろうか。

最初に、自己に対する受動的なコントロールを考えた時、自分の一つの思い（考え方）に自分を、合わせていこうとする姿勢が、そこに浮かび上がってくる。これは見方を変えれば、自分の中にある一つの思いにとらわれてしまつて、それ以外の考え方が出来ずに、その考え方から自由になれない状態と見ることも可能であろう。

これに対して、自己に対する能動的なコントロールにおいては、自分の思い（考え方）の方を、自分に合わせていこうとする姿勢であつて、ここに、執着といったような自分のこだわりから自由になる姿を見出せるであろう。

例えば、「自分に対する劣等感」を例にあげて、これに対する二つのコントロール感の違いについて考えてみよう。前者においては、自分の劣等感そのものをなくしようとのみ努力を続け、劣等感の対象そのものがなくならない限り（本人がなくなつたと思えない限り）、自己に

対するコントロール感を得られないのである。

これに対して、後者においては、劣等感を感じているその気持ち自体を変化させるべく、自分の気持ちをコントロールしようとするのである。このように、自己に対する能動的なコントロール感とは、自分の感じ方、考え



方から自分自身を自由にすることであると換言してもよいであろう。そして、その事が結果として、自分に対する劣等感自体をも克服させてしまうことが多い。

しかし、自己に対する能動的なコントロール感を持つことは、実際には、大変に難しいことであって、全ての人間が負っている人生の課題であると言っても過言ではないであろう。そして、またこの課題は、人間が、自分一人の力だけで成し遂げられるものでもない。そこには、周囲の人間の暖かい交わりと援助が不可欠である。

以下の事例は、この大きな問題を語るには、あまりに小さな事例ではあるが、幼い人が、幼いなりに、この課題に挑戦している一つの生の姿として、ここにあげておきたい。

### △事例3―6▽

Aは、朝から機嫌が悪い。着替えを親に手伝わせ、朝食のしたくの間も、Bをいじめ、わざと泣かす。目覚めの時を振り返ってみると、Bが先に起きていて、Bの声に対して「うるさい！」と怒鳴ったのが、本日の第一声であっ

た。その後も、食卓にはなかなか付かず、皮をむいて出されたゆで卵を見ると、自分でむきたかったのに、と言ってひと泣きする。次には、いつも食べているサラダが嫌だと言って、食事中にイスから降りて床に寝てしまう。私は、気付かないふりをしてあまり注意をせずに、食事を続けている。Aは「今日は、保育園には行かない！」などと、一人言風につぶやいている。そうして十分位寝ていたらどうか、Aはおもむろに起き上がると、もっと食べると言うて、一人でパンを焼き始める。焼き上がったパンを私にくれ、後にスムーズに食事を続け、保育園のしたくをして、家を後にする。

(家庭にて)

起きた時から、Aの心の中には、モヤモヤとした不充足感があつたようだ。自分が目覚めた時に弟が、すでに起きていたのが一つの原因かもしれない。不機嫌なAは、一つ一つのことを弟と比べ、手をかけられているBをうらやましく、憎らしく思い、自分も母親にBと同じか、それ以上のことを要求する。要求をかなえてもらえば、一応の満足は得られるものの、Aの本当の不機嫌の

原因は、母親に自分の出来ることをしてもらいたい、というところにあるのではないようだ。

ゆで卵の皮をむくという事は、母の手伝いの一つで、着替えのように、当然自分でやる事という訳ではない。Aが自分で出来、またそれを要求されている着替えは、自分でやるうとせず、しなくてもよい手伝いである、卵の皮むきをしたかったと言って泣く様子に、この子どもの不安定な心を見る。

この不安定なAの気持ちを修正させた要素はいろいろあるであろうが、一つは、親がAの、このイライラに付き合ったことであり、もう一つは、Aがテーブルの下で寝るという「間」としての時を持ったことであつたと思う。

子どもが自分の気持ちを壊してしまっている時、それに付き合う大人もまた、随分イライラさせられることが多い。子どもをきちんとさせたいという、親のしつけ感覚を刺激される面も多いと思うが、より深い所で、子どもと同じレベルで、イライラしている大人の心があるよ

うに思う。この朝も、もしも、親が生の気持ちで、子どもイライラに対応していたら、以下のように子どもにも対していた可能性はあると思う。(1)着替えを自分でできるように言つて、全く手伝わない。(2)弟をいじめないように強くしかる。(3)ゆで卵に関しては、せっかくむいてやったのにと怒る。(4)食事中にイスから降りてしまふ事を注意する。

この日に、これらの注意を全くしなかつた訳ではないにしても、Aの行動を強く規制しなかつたこの時の親の対応が、ベストであつたかどうかは、わからないことである。ただ、親としては、Aのネガティブなこれらの振る舞いの奥に、自分でもコントロール出来ないA自身のことじれた気持ちを感じ、少し様子を見ようとしたのである。

Aが、机の下に寝てしまつたのも、「再生の時」と考へると興味深い。(本田和子(一九八〇)『子どもたちのいる宇宙』は、子どもが身を横たえる中に「時の更新」「再生」といった意味を見出し、考察を加えている。)Aは、

目覚めの時からの不機嫌な気持ちを、親に対する受動的なコントロール感を得ること——親に依存的になる事——で解消しようと努めたものの、親が自分に応えてくれた後にも、イライラした気持ちを修正することは出来なかった。Aが食事を中断してしまったのも、A自身が、その時の自分の気持ちを受け入れられなくなった事の一つの象徴と見ることも可能であろう。それ故に、しばらくの間、Aは「死ぬ」(寝る) 必要があったのである。 「再生」したAは、自分からパンを焼き始める。食事も食べられなかった少し前とは、打って変わった様子である。Aにとって、パンを焼くとは、少し背伸びした仕事である。以前に、母親が病気で起きられなかった時があったが、この仕事は、その時に、父親と食事を作る中で、私がAに教えたことであって、ガスや火を一人で扱ったのも、この時が初めてであった。Aにとって、このように「誇らしい仕事」の象徴であるパン焼きを、再生後に、自分から始めようと思いついた事は、大変興味深い点である。

このように、本人は意識していた訳ではなかったであろうが、親の援助はあったにせよ、Aが自分の気持ちを自分の力で修正できたこと、すなわち、自分の気持ちを変えることによって、その状況を乗り切れたことは良かったと思う。

この日の出来事は、取るに足りない小さなことである、しかし、この小さなことが繰り返され、重ねられて行くことこそが、生活そのものに他ならない。そして、この小さな出来事の中で、Aが自己に対する受動的なコントロールを能動的なコントロールへと、変容させられたという事実を大切にしたいと私は思う。自分の問題は、結局自分で解決するしかないのであるから。

—— おわり ——

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

#### 参考文献

本田和子 一九八〇『子どもたちのいる宇宙』三省堂